

審査の結果の要旨

氏名 伊芸 研吾

本論文『Disability, Poverty, and Employment in Developing Countries: An Econometric Analysis Using Household Survey Data in South Africa (途上国における障害と貧困および雇用：南アフリカの世帯調査データを用いた計量分析)』は、南アフリカのデータを用いて障害が多面的貧困および雇用に与える影響について定量的に分析し論じたものであり、全五章と付録から構成される。

第一章では、発展途上国における障害と貧困の問題が近年重要な開発課題になっている一方で、既往研究の分析は十分でないことが論じられ、本論文では、同分野でこれまで使われなかった計量経済学の手法を用いて、障害が多面的貧困および雇用に与える影響を分析すると述べられている。第二章では、まず障害の定義や障害と貧困の関係性に関する理論的枠組みが示され、続けて既往研究のレビューと南アフリカの障害者を取り巻く状況が論じられ、本研究の仮説を提示している。第三章では、南アフリカの人口センサスを使用し、マッチングや分解分析の手法により障害者と非障害者の多面的貧困状況を比較している。第四章では、同国の統計局が実施した世帯調査を使用して、疑似的パネルデータを構築し、障害が雇用に与える影響を分析している。第五章では、分析結果をまとめ、政策含意を導出し、残された課題について論じている。

本論文の主な特徴は以下の点である。

第一に、定量分析の手法における貢献が挙げられる。障害と貧困には、障害があることによって貧困に陥る可能性と、貧困であるからこそ障害を持つ可能性が高まるという双方向の因果関係があることが指摘されているが、計量経済学の手法を用いて分析する際、この双方向の関係は推計上に内生性という問題を生じさせ、推計結果にバイアスがかかる。これに対応して分析を行っている既往研究は数少ないが、本論文の第三章、第四章では、従来この分野では用いられてこなかった推計方法を用いて、貧困が障害に与えるバイアスをできる限り除去して、障害そのものが貧困につながる影響を分析している。

具体的には、第三章では **Exact Covariate Matching** という手法を用いて、複数の点において同じ特徴を持つ障害者と非障害者のサンプルをマッチングし、様々な貧困を示す指標における差が統計的に有意であるか調べた。本手法により、観測できる特徴に起因する内生性を除去できている。更に、**Matching-based Decomposition** という手法により、貧困度合いを障害によって説明できる部分とそれ以外の要因で説明できる部分に分解し、前者がインパクト評価の文脈で用いられる **Average Treatment Effect on the Treated** と同一であることを数式モデルによって明らかにした。

第四章では、観測できない特徴に起因する内生性をも除去するため、コホートレベルで疑似的パネルデータを構築し、固定効果モデルを用いて障害が雇用に与える影響を分析した。本手法によって、障害の有無そのものが雇用状況に与える影響をより正確に推

計することができている。このように、本論文は当該分野でこれまで用いられることのなかった手法を用いて、障害が貧困および雇用に与える影響について、頑強な分析結果を提示している。

第二に、本論文は大規模データを使用していることに特徴がある。第三章では人口センサスの 10% サンプルデータを使用しており、サンプル数は約 434 万人である。多くの障害に関する研究は、障害者サンプルの少なさが分析できる内容に制限を与えているが、このような大規模データを使用することで、障害を種別に分けた分析や、サブグループごとの分析を詳細に行うことが可能となっている。同様に、第四章では 14 年間に渡る世帯調査のデータを使用することで、経年の変化に関する分析が可能となっている。

第三に、上記の手法やデータを使用したことにより、既往研究に比して、より確かで、より詳細な定量的なエビデンスを提供した点に貢献がある。具体的には、第三章では、障害以外の観測可能な要因を同一にしたうえでも、障害者は非障害者に比べて多元的貧困状態にあること、特に知的障害や複数の障害を持つ人、成年男性、黒人、カラード、農村地域住民において、それがより顕著であることを明らかにした。更に、若年層では障害者と非障害者の差の大部分が障害そのものに起因する一方で、高年齢層ではその他の要因の影響も大きいことが分かった。第四章では、障害が雇用に与える負の影響は、黒人男性の間で最も大きいことが分かった。また、南アフリカでは障害者への差別禁止や機会の均等に関する法整備が他の途上国に比べて進んでいるにも関わらず、14 年におよぶ分析期間において障害の負の影響が緩和されたとは必ずしも言えないことも明らかになった。

上述の通り、本論文は途上国における障害と貧困および雇用の関連性を、これまで同分野で使われていなかった手法と大規模データによって丁寧に分析したもので、障害を持つことの影響をより正確かつ詳細に示した点で学術的貢献が高いと判断した。

したがって、博士（国際協力学）の学位を授与できると認める。

以上 1,997 字